

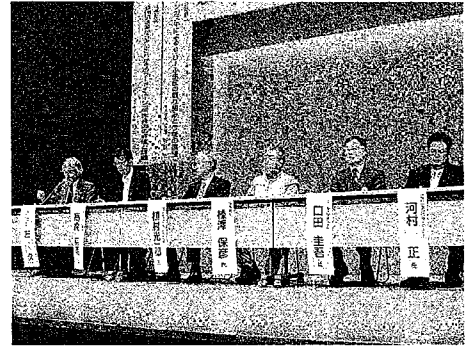
○ 帯広市で資源循環型肉牛生産シンポ、情報開示して生産者のこだわりの発信が重要

地域の副産物の飼料利用など資源循環型牛肉生産の浸透を図ろうと「第8回資源循環型牛肉生産シンポジウム2011」(主催:環境リサイクル肉牛協議会、北海道アンガス牛振興協議会、北海道日本短角種研究会)が2日、北海道・帯広市内で開かれた。生産者、流通事業者、研究者など129人が参加、地域の副産物や自給飼料の活用とそれに適した品種特製を持つ牛肉生産、消費者が期待する肉質などに関して講演会とパネルディスカッションが行われた=写真。

会場では、主催者を代表して環境リサイクル肉牛協議会理事の左久氏が「我が国牛肉産業は、01年のBSE以来、輸入穀物価格の高騰、口蹄疫の発生、放射性セシウム汚染ワラ牛肉の問題と、この約10年間厳しい状況に直面し続けている。このようななかで、地域の副産物や自給飼料を活用する資源循環型牛肉生産を展開するには飼料の工夫と共に牛の品種特性を生かしながら進めていく必要がある。そして、生産される牛肉の特性・肉質について消費者に理解を得ることが大切である」と挨拶した。

その後▽牛肉の美味しさ評価とその活用による牛肉生産の展望▽日本短角牛肉の新たな肉質評価法▽アンガス牛によるe-びーふ生産の取り組みと今後の展望▽食肉流通業からみたこれからのフードチェーン:牛赤身肉の評価と課題——をテーマに講演会が進められた。このなかで食肉流通事業者代表として、ミー

トコンパニオン常務執行役の植村光一郎氏は、各地のセシウム汚染ワラ牛肉の問題、中国の日



本産和牛についての捉えられ方、中国の肉牛生産の現状、海外肉牛生産者の取り組み、沖縄、岡山や埼玉などのブランド化の取り組みを紹介。これに対して生産者からは、国産牛肉の輸出問題、消費者との情報の取り方、ブランド化する上での最低頭数の確保規模などについて活発な意見交換や質問が上げられた。

ブランド化について植村氏は、流通上、最低年間500頭以上の出荷規模が必要になるとの見方を示したうえで、比較的規模が大きい北海道とはいえ、農家がそれぞれ独自に展開するのではなく、生産農家がまとまってブランド化を進めることが重要だと指摘した。そのうえで「消費者の購買行為を生産工程として捉え、消費者に生産工程を開示して生産段階のこだわりや優位性を発信すること、健康で美味しい牛肉を作ることがいま求められている」と強調した。

○ スターゼンが連結業績予想を下方修正、個別業績は加工食品好調で上方修正

スターゼンは4日、2012年3月期第2四半期の連結業績予想を、セシウム問題により国産牛肉の売上高が減少したことから売上高・利益面とも下方修正した。しかし、個別業績では、主に加工品販売が好調に推移したため上方修正した。

それによると、連結業績予想は、売上高1,283億1,300万円(前回予想1,300億円)、営業利益76億円(120億円)、経常利益11億4,900万円(13億円)、四半期純利益4億6,500万円(6億円)と、それぞれ下方修正した。7月に

発生した国産牛肉でのセシウム汚染問題で牛枝肉相場が低迷し、さらに一部の県で出荷停止が行われたことで国産牛肉の売上が大幅に減少する一方、鶏肉、豚肉、加工品分野など幅広く拡販に努め、前回予想を若干下回るものになったもの。

また個別業績では、売上高100億200万円(前回予想95億円)、経常利益13億3,100万円(11億円)、四半期純利益9億6,300万円(5億円)と、主に加工食品の販売が堅調に推移したため、それぞれ上方修正した。